

地下鉄の夜

大村伸一

歩いていると、地下鉄の駅の構内にいた。壁に大きく書いてある駅名は、最初「どこでもない」のように見えたがそんな名前の駅がないことはよく知っている。もう一度見ると、それは蛙の文字で書かれていることが分かった。蛙が文字を使っているはずはないのだけれど、それは蛙の文字に違いなかった。

駅にはまだ電車は入っておらず、プラットフォームの両端に続く闇の中に線路が消えているのが見える。電車を待つ人影はひとつもなく駅員の姿も見えない。天井の電灯はまったく変化しない白い光を放ち時間が止まっているように感じた。時間が止まっているのかどうか確かめようにも時計はどこにもなかった。時計があったとしても時間が止まっているのかどうか分かるものでもないだろうに。誰もいないのは最終が出たあとなのかもしれないけれど、灯りがついているのだからまだ最終の時間ではないのだろう。

駅の両端にある暗闇のトンネルの向こうからは何の音も聞こえない。世界がその先で終わっていることを知らないのは僕だけなのだろうか。駅には蛙の姿はなかった。あの暗闇の中からずっとこちらを伺っているのだろうか。蛙はそれほど人間に興味を持ってはいないと思う。食べられるわけでも交尾できるわけでもないのだから。それに人間は歌をうたわない。うたわないものは無意味だ。蛙ならそう考えるだろう。

構内の壁には広告や案内の大きなポスターが貼られている。その隅のほうにときどき存在するはずのない蛙の文字の落書きがあった。その落書きをよく観察してみるとどうもその中には蛇の文字も混じっているような気がしてならない。蛙の文字よりこころもち大きくてのんきな雰囲気を出そうとわざとゆったり引いた線はまぎれもない蛇の文字だった。蛙だけでなく蛇がどうやって文字を使うのかは分からない。それでも蛇の文字だということは分かった。

暗闇のトンネルの中には蛙だけでなく蛇もひそんでいるのだろう。蛙と蛇を見分けるのは難しい。どちらも皮膚は湿っていて薄く指で触るとその内側に隠された内臓が分かる。どちらも卵から生まれ、成長の過程で蛇になるものと蛙になるものに分かれる。

駅にただようにおいはプラスチック板を切断するときに摩擦によって焼けた素材の発するにおいで、もしかすると地下鉄の車両はプラスチックでできているのではないかと思わせる。床に当たる靴底が妙に軽い音を立てているのは駅の床がプラスチック製だからかもしれない。ただ、線路だけはプラスチック製であってははならないと、市の条例で決まっていたはずだ。市議会の半数がすでに蛙であり、残りの三分の一は蛇であると、打ち明けられてももう驚くことはないだろう。あるいはこの駅自体がプラスチック模型になっているのを知らずに、僕は入り込んでしまったのだろうか。蛙はプラスチックの卵から生まれ、水に沈むことがない。蛇はプラスチックの牙を持ち、誰にも毒を与えない。そんなことわざがあったことを思い出した。子供の頃はその意味が分からなかったが、今ならよくわかる。

構内にかすかに風が流れている。この地下鉄は海に続いているのだろうか。トンネルから流れてくるのは海産物のなまぐさいにおいだった。改札口を通過して水が流れてくる。水は構内をゆっくりと流れプラットホームの床をひたして、線路の上に滴り落ちる。すこしずつすこしずつ流れてくる水は、プラスチックでできているベンチや床のタイルを浮かび上がらせる。

もしも蛇がプラスチックの皮膚を持ち、つまり蛇こそが未だに来ることのない電車であるならば、きっとそんな電車に乗る乗客は誰一人いないだろう。あるいは、この駅で電車を誰一人待っていないのはそのせいだろうか。僕は黄色い線に沿ってプラットホームを何度も往復した。改札口から流れてくる水は途切れることがなく、僕の靴を濡らしていた。ズボンの裾もやがて濡れて色が変わり、僕の足取りも重くなった。電車は来なかった。

もしも蛙がプラスチックの瞳を持ち、つまり蛙こそが未だに姿を見せないこの駅の駅員であるならば、きっとそんな駅員のいる駅には誰一人来ないだろう。あるいは、この駅で電車を誰一人待っていないのはそのせいだろうか。僕はもう一度壁に貼られたポスターの、蛙の文字を読んでみた。

「卵時代」

「おたまじゃくしよ永遠に」

「手足の生える頃」

「尻尾よさらば」

いつのまに読めるようになっていたのか自分でも気づかなかったが、そこに書かれた文字に他の意味があるとは思えなかった。蛇の文字はこう書いていた。

「舌の先にも魂」

「たわみとわたし」

「飲み込めば週末」

いつのまに読めるようになっていたのか自分でも気づかなかったが、そこに書かれた文字に他の意味があるとは思えなかった。

壁のポスターを見ている間に改札口から流れてくる水は線路に溜まり、金属のレールはすっかり水中に沈んでしまった。そういえば、蛙の文字や蛇の文字には水のことはまったく触れられていなかった。蛙は水が嫌いなのかもしれない。蛇も水が好きだという話は聞いたことがない。だとすると、蛇の列車はこの駅に来ることはないだろうし、そのことを告げに蛙の駅員が構内に現れることもないだろう。

僕はプラットフォームから線路の上に降りた。

するとそこは砂浜だった。